

ヘーゲルとヘルダーリン

岡崎英輔

青年期ヘーゲルの思想の展開にとっていわゆるフランクフルト期はとりわけ重要な意義をもつ。なぜなら、この時期にはじめてヘーゲル独自の思想が、萌芽の形ではあれ、登場してくるとみられるからである。だが、それがいかなるものなのか、なぜ、ほかならぬフランクフルト期において登場してくるのか——このような視点から、以下、この期の伝記的事実のうちヘルダーリンとの再会という出来事を、そのもつ意味ともども、概略たどってみたい。

—

一七九七年の初め、ヘーゲルはかつてチュービンゲンのシュティフトで「盟約」を結び合い、「神の国」を合言葉として別れた^②ヘルダーリンとフランクフルトにおいて再会する。その再会は両者に、かつてシュティフトで交し合ったとき感傷的交友を味わわせてくれたであろう。しかしながら、この再会がもたらしたのはこのような交友のみであつたらうか。むしろそれに加えて、この再会は両者の間に哲学上の対話、さらには対決を喚び起したのではなかつたらうか。そしてこのような再会とそれに引きつづく交友のただ中において——ヘーゲルがのちに、この時期の自らの精神的営為を要約して言うように——「青年時代の理想は、反省形式へ、同時に一つの体系へと変つて」^③いき、こうして、それぞれ独自の思想を懐胎していったのではないのか。——以上を明らかにするための下準備として、つぎに、この再会にいたるまでの両者の思想の歩みを簡単にみてみよう。

詩人ながらも哲学に深い関心をいだいていたヘルダーリンは、周知のように、カントの自由についての教説の信奉者であった。けれども哲学の出発点を思惟主体としての自我の意識の統一におくカントの考えにはつねに反撥していた。なぜなら、天成の自然詩人ヘルダーリンはすでに早くから自我と自然との対立を超えたところに存する「全一的なもの」を自らのものとしていたからである。それは少年時代における自然との交歓や「母たち」との愛の日々の中に体験されたものであり、自然との和らぎであり、また、それは後年の『ヒューペリオン』の一節に印象深く聴きとれる愛の階和、すなわち、個がそのもとに抱擁され、その中ではすべてが互いに相和しいつくしみ合う底の「全一的なもの」にほかならない。けれどもヘルダーリンはこのような調和は現実には失われており、たかだか詩的世界にしか住みえないことを知っていた。だが、どうして愛の調和は現実のうちに見出されないのか――チュービンゲンのシュティフトにおいてヘーゲルそしてシェリングと精神的交わりを結んでいた頃のヘルダーリンの関心はここにあったと思われる。それは、人間が自我を固執し、それによって愛の階和を遠ざけているからである。それゆえ肝要なことは愛と我意との対立を克服し「全一的なもの」を、したがって愛の調和を現実のものとするのである。そしてこれこそ「理想」なのである。

このような理想を掲げるヘルダーリンに一つの方向づけを与えてくれたのが晩年のシラーにはかならない。というのはシラーも、カント哲学を踏まえながら、現実を義務と傾向性との対立ととらえ、これを「愛」によって統一しようとしていたのである。^⑤とはいえシラーにおいて愛は対立を離れたものではなく、その和解であり、たしかにそれなりに豊かな内容に導きはするが、結局は相対立する項を橋わたしするだけの役割しか与えられていない。対立に先行する底の全一的なものとは考えられていないのである。

他方、ヘルダーリンにおいて愛は結び合さるべき一切のもの、例えば絶対者への要求であれ感性的な、ささいなものにかかずらう傾向性であれ、それら一切のもの――したがって一切の対立――にかかわる。

してみればかかる愛こそが対立を合一し全一的なものを実現するの
でなければならぬ。むしろ詩人の体験が教えるように、先ず全一的なものがあって、それから愛が、対立が考えられるのである。このよ
うな愛は、この世の一切の調和の根源——われわれもそこから生れてきた——に向おうとする要求を意味すると同時に、現実における対立の合一をも意図するものといえよう。

問題は、このような愛がいかにして理論的に基礎づけられるかということである。ヘルダーリンはこの理論的基礎づけのための手掛りを精神の「巨人」フィヒテの哲学のうちに見出す。というのもフィヒテは、その『知識学』の中で、意識について、それがカントにおけるがごとく多様の総合ということからではなく対立からのみ解されうること、そしてその対立はそれ自身また統一の根拠を要求するものであることを説いていたからである。⁶ただしこの意識は、一切の対立するものを包括する無制約的なものとはいえず、あくまでも自己意識にはかならなかった。それゆえヘルダーリンは、この意識がまだ主観性を払拭しえず、対立にとらわれ、したがって全一的なものには達しえないとして、これを愛に置きかえる。すなわち、フィヒテの意識の主観性をいわば克服しつつそれに愛の性格を帰するのである。——こうして愛は対立からのみ解されることができ、そしてその対立は統一の根拠すなわち全一的なものを要求するものであることを哲学的に根拠づけることができた。とはいえず、その全一的なものがいかにして実現されるのか、また、根源的全一的なものから現実の対立がいかにして生じうるのかということについては、ヘルダーリンはまだ答えうるまでにはいたっていない。たしかに、愛が静的な状態においてではなく、対立による運動においてのみ把握されるべきものとみたとき、同時に全一的なものからの展開が歴史的に進行するであろうことに思いを致したこともあったであろう。だがともかく、この段階では全一的なもの、ならびにそれからの現実的展開の問題についてヘルダーリンはまだ納得のゆく説明を与えられないでいた。——フランクフルトでヘーゲルと再会するときのヘルダーリンの思想は大略右のようであったと考えられる。

先にみたように、ヘルダーリンとは「神の国」を合言葉に（そしてシェリングとは「理性と自由を合言葉に」）「見えざる教会」⁷における再会を約して別れ、ひとりベルンに赴いたヘーゲルはこれを現実の宗教の対極としてのカントの理性的道德宗教のうちに見出そうとしていた。⁸——理性と自由ともとづく宗教こそ、したがって非理性的な奇蹟や自由を抑圧する組織や権力等が存立の場をもたない理性的宗教こそあるべき宗教であり、自由な市民の宗教にほかならないのである。そしてこのような宗教の創始者としてのイエス像が新たに構築される。

しかし、その間にも、この把え方に対する疑問が浮び上ってくる。というのは、もし理性的道德的宗教があるべき宗教であるなら、その具現者イエスが創めたキリスト教が非理性的権力的因襲的——一言でいえば——「実定的」であるはずがない。ところが現実のキリスト教は実定的なのである。これをどのように考えたらいいか。——このように問うてヘーゲルは実定性の源の吟味に向う。そしてその源を、差し当り、理性的なものを説くときにとらざるをえない外的な事情に帰する。例えば、イエスの自律の教えが、他律に慣れたユダヤ人たちに受容られるためには、それ自身命令や掟といった他律の形をとらざるをえず、これが実定性の源となったというのである。だが、この解決は新たな問題に導かずにはいない。なぜなら、右のように把えることは自律が他律に、理性的なものが非理性的なものに依っていることを認めることであるが、そのことがとりも直さず、理性的宗教こそあるべき宗教であり、したがって非理性的なものを斥けようとした出発点でのヘーゲルの考えそのものを疑問とせずにはいないからである。こうして、ベルン後期のヘーゲルは、カントの理性宗教を奉じつつも、実定性の問題を介して、みずからの思想的立脚点に関する深刻な反省に導かれる。それは同時にカント主義を棄てることなく、しかも実定性の問題を克服しようとする新たな思想的立場を模索する試みにほかならなかった。それは、言うまでもなく困難な試みであり、したがってヘーゲルに大きな精神的苦闘を強いたであろうことは推

測に難くない。――例えばベルンからフランクフルトに赴く途中故郷に立ち寄ったヘーゲルが――旧友との再会を前にしながら――「ふさぎこんだ様子」をしていたと伝えられるのもその試みの困難さを証しているように思われる。――ともかく、それまでとってきたカント主義に疑問を感じながらも、いまだそれを克服していないヘーゲル、このようなヘーゲルがすでにカント主義をはるかに超えていたヘルダーリンと再会するのである。

二

周知のように、この再会は一七九七年一月、ヘーゲルがベルンからフランクフルトへ移ってきたことをもって始まる。このように取り計らったのはヘルダーリンであり、それは旧友が近くにおれば互いに助け合い励まし合い、学問や人生の問題について関心を共にすることができるといふ期待からであった。⁽¹⁰⁾ヘーゲルは喜んで応ずる。すなわちヘーゲルはこの再会に先立ち「エロイジス」と題する詩をヘルダーリンに寄せ、その中で彼らの以前の「盟約」への忠誠をほめたたえているし、また書簡の中でも旧友と相いだしあう喜びを述べているのである。この事情はヘルダーリンにおいても同じであった。というのもヘルダーリンはヘーゲルの到着後すぐ友人に宛て、平静な理性人ヘーゲルとの交際は自分にとって大変にありがたい、なぜなら自分や世界の問題で混乱したときでも、そのような人のそばにいたとうまく方向づけることができるから、⁽¹¹⁾と書く。すなわち期待は叶えられたわけである。

このように、シュテイフト卒業以来三年余をへだてての再会は両者に出合いの喜びと人間的な交わりとをもたらしたが、しかし、そのみにはとどまらなかった。というのもこの再会は、思想の面では、先に触れたように、哲学上の対話的な対決の性格をもっていたと考えられるからである。すなわち、それは、カントの理性宗教の立場に立ちつつ宗教の実定性の源を探り、これによってかえって理性宗教の

立脚点疑問を感じはじめていたヘーゲルと、そのような問題設定を、したがってカント的立場を超えてフイヒテの考えにまでいたり、さらに進んでこのフイヒテ哲学に難点を見るまでに先んじていたヘルダーリンとの対決であり、しかもヘーゲルはこのような問題に関してはヘルダーリンひとりだけではなく、ヘルダーリンをとりまく若い思想家たちとも対決しなければならなかったのである。

両者はたびたび会同し、さかんに討論を交したであろう。そしてその討論の或るものについて、それが哲学的問題をめぐってのはなはだ激烈なものであったことが報告されている。この討論の内容（一般的にいえば両者の対決の内容）がいかなるものだったのか、それを跡づける資料は存しないが、しかし、フランクフルト期におけるヘーゲルの立場の急激な変化から、その討論の内容を或る程度推測することはできる。のみならず、ヘルダーリンの信奉者であり、ヘルダーリンの哲学の体系化を試み、ヘルダーリンが狂気に陥ってからは献身的な庇護者となるジンクレールが、ヘーゲルとの間に交した討論を詩の形で伝えているところからもその内容の一端をうかがい知ることができる。¹³ ここではジンクレールはヘルダーリンのいわば代弁者としてヘーゲルとわたり合う。それは、要するに、カント主義者ヘーゲルに対するに、根源（全一的なるもの）を確信しながらもそれが現実には失われたことを知りつつ、それを発展的に再獲得しようとするヘルダーリン¹⁴ジンクレールとの討論であった。しかもこの両者はみづからの立場にあるいは疑問をいだき、あるいは十分な裏付けを与えていないことを感じているのである。（討論がこのような場においてなされるとき、それは時には――先にみたように――激しいものとなるであろう。）とはいえ、この討論においてはヘルダーリン¹⁵ジンクレールの批判にヘーゲルの答はしめりがちである。たしかにここでもヘーゲル独自の思索の強靱さがみられるし、ヘルダーリン¹⁶ジンクレールの立場を根源的なものとそれからの展開という点で衝くヘーゲルの批判には鋭いものがある。だが、それにしてもヘルダーリン¹⁷ジンクレールの方がはるかに進んでいたのである――。

こうしてヘーゲルは考えの変更を迫られる。すなわち、ベルン後期以来カント主義に対してい

いた自己の疑問が正当なものであったことを討論の過程において思い知らされたヘーゲルは、以後カント主義から距離をとり、あるべき宗教を実現するための、例えば自律と他律、理性的なものと実定的なものというごとき対立の「合一」を——ヘルダーリンの影響のもとにであろう——「愛」としてとらえることになる。(4)。(したがっていまや愛の宗教があるべき宗教である。)このように対立の合一を愛とみるとき、この愛は現実を統一的有機的全体として思想によって把握することを可能ならしめる。ここから愛は自由な生の最高の思想となる。

愛が右のようであってみれば、かかる愛の受容こそフランクフルト期ヘーゲルの思想の発展にとって決定的な意義をもつとあってよい。たしかにこの愛もはじめから右のように解されていたわけではなく、最初はカント的にとらえられ、世界に対する態度のとり方と解されていたようである。(5)だが、いまや愛は合一する力であり、それによって自律と他律、自由と自然、主体と客体は相互に結びつき、それらはいずれもが本質としてとどまり、しかも他者と分ちがたく結びつくことになる。そしてこの「愛」が、のちにより具体的に「生」ととらえ直され、さらには「精神」にまで展開され体系の中心となるものであることは言うまでもない。してみれば、このような愛の受容、さらにはこの愛を受容させるにいたったヘルダーリンとの交友・討論そして対決は、何と云っても、最重要事に数え入れなければならないであろう。

三

ヘーゲルは、ヘルダーリンの影響のもと、のちの体系の根本概念につらなるものとして「愛」を受容した。とはいえ注意すべきは、ヘーゲルが受容した愛はヘルダーリンの愛そのものではないということであろう。というのも、ヘルダーリンにおいて愛は二重の観点から、すなわちひとつには全一的根源的なものへ向う努力として、またひとつにはわれわれ存在の合一を失ったものへの関係から理解されてい

たとみられるのに反し、ヘーゲルにあってはこのような生の二重性については何らの顧慮も払われていないのである。愛とは単に主観と客観の合一でしかない。愛はそれに先立つ何もかも要しないのである。それゆえ合一としての愛はヘーゲルにとっては一つの出来事なのであって、出来事がそこから生ずる根拠といったものではない。それは関係の在り方であって、さらにいえば、関係の絶対化の別称にほかならない。―それゆえにこそこの愛はのちに精神にまで転化されえたのである。

だが、このような両者の愛の相異は何に起因するのか。ヘーゲルがヘルダーリンの愛を誤解して受容したことに因るのだろうか。だがそうではないであろう。それはむしろフィヒテに対する両者の態度の相異にもとづいているとみるべきであろう。⁽¹⁶⁾すなわち、まず、ヘルダーリンはすでに早くフィヒテ哲学の最高の原理である自我の絶対的無制約性を棄て去り、それに代えて合一としての愛（それは自然と自我の双方を包括する）を立てた。それにもかかわらず、フィヒテ哲学における無限の努力すなわち自我の絶対的無制約性に到達しようとする無限の努力を愛の努力とみて、これを依然として保持しつづけた。つまりは、フィヒテ哲学の内実はこれを否定したが、その方法は依然として保持しつづけていたのである。むしろ生の二重性を現実のものとして認めつつ、なおも全一的なものを求めようとする場合には、愛はそのような全一的なものへの努力以外のものたりえないというべきであろう。

他方、ヘーゲルはカント哲学がそれのみでは全一的なものを実現できないことを自覚し、これから批判的に距離をとったが、カント哲学そのものを放棄することなどは思いもよらないことであった。なぜならヘーゲルはカント哲学の意志の自律、また理性宗教の純粹さ等に深い共感を覚えていたからである。それゆえこの共感に背馳せず、しかも全一的なものを実現するはずのものが求められねばならなかった。それがフィヒテの自我の哲学だったのである。とはいえフィヒテの説く自我はつねに对象的自我にとどまり、したがってこれのみによって全一的なものを実現することは不可能である。ここにおいてヘーゲルはこの自我と全一的なものとの関係を考え直す。こうしてヘーゲルは自我と対象との関係を、全体と

して、そして過程として、しかもそれを「愛」としてとらえたのである。たしかにこの全体はわれわれの意識ではないし、また自我も展開の過程以前に存するわけではない。だが過程として存在するこの全体、したがって過程それ自身はただ自我性として主観性の構造から理解されることができ(17)。ヘーゲルはフィヒテの自我の内容をこのようにとらえ直して受容したのである。

ところで、自我がこのように自足的であり、したがって全一的なものがこの自我性の構造のうちに存するとされるとき、全一的なものを根拠とみてそれに無限に接近してゆく努力といったものはヘーゲルにおいては意味をもたない。すでにみたように、全一的なものは根拠ではなく出来事だからである。それゆえヘルダーリンが保持しつづけたフィヒテの方法およびこれにもとづくヘルダーリンの努力としての愛は、ヘーゲルからすれば、いわば悪無限にほかならないのである。

このようにヘーゲルはフィヒテの方法はこれを否定しながらその主観性の思想は受容した、すなわち、ヘルダーリンが自我の強調したがつて自然の軽視としてフィヒテを批判したまさにその点を、ヘーゲルはそれこそがカントの自律の教えに連なるものとして評価しつつ受容したのである。――フィヒテに対するこのような態度の相異は自然詩人と精神の哲学者との相異に由来するともいえようが、ともかく――ヘーゲルはこのような理解こそフィヒテを真に理解するものと考えたのであろう、死後フィヒテの傍らに葬られることを望んだのであった。

以上、ヘーゲルはヘルダーリンの影響のもと「愛」を受容したが、この愛が――のちに「精神」へと開花するときヘーゲル独自のものとなりえたのはヘルダーリンのフィヒテ理解にいわば対決することによってであったということ、したがってかかる影響や対決をもたらしたヘルダーリンとの再会とそれに引きつづく交友はヘーゲル(19)の思想の展開にとって重要な意義をもつことを概略示しえたいと思う。

後記 本稿は昭和五三年度弘前大学哲学会大会において話したものの一部をまとめたものである。まとめるにあたって、発表のさい寄せられた批判等を一部考慮することができた。

註

- ①「エロイジス」ヘーゲル書簡集（ホフマイスター編）第一卷一八 ②書簡集 五 ③書簡集 二九
④ヘルダーリンの詩的世界の理解については手塚・浅井他訳『ヘルダーリン全集』全四卷（昭和四一
〜四四）の諸翻訳ならびに解説論文に多くを負う ⑤D・ヘンリッヒ「ヘーゲルとヘルダーリン」
（『コンテキストからみたヘーゲル』一九七一 所収）一五頁以下参照 ⑥D・ヘンリッヒ 上掲書
二〇頁 なおフィヒテへの傾斜については速水敬二『ヘーゲルの修業遍歴時代』九一頁以下 ⑦書簡
集 八 ⑧以下ヘーゲル『初期神学論集』（ノール編） ⑨ホフマイスター編『ドクメンテ』三九四
頁 ⑩書簡集 一九 ⑪速水、前掲書 三四三頁 ⑫ヘルダーリンの弟カールによる。彼は一七九七
年初頭ヘルダーリンに案内されヘーゲル宅を訪問する。ヘーゲルはカールを歓迎したが、しかしすぐ
にヘルダーリンとの間に激烈な討論が開始され、カールはほったらかしになってしまったという（手
塚富雄「ヘルダーリン伝」四七） ⑬H・ヘーゲル『イサーク・フォン・ジンクレール』一九七一
二八四頁 またD・ヘンリッヒ 前掲書 二二〜二九頁参照 ⑭愛については前掲『初期神学論集』
三七八〜八二頁参照 ⑮D・ヘンリッヒ 前掲書 二七頁 ⑯同上 二八頁以下参照 ⑰同上 三八
頁 ⑱ヘーゲルとフィヒテとの関係については通常これと逆の言い方がなされる、すなわちヘーゲル
はフィヒテの方法を受容しその内容を否定した、と。しかしこの言い方といえどもヘーゲルがフィヒ
テの方法のもつ悪無限性までも受容し、また、例えば意志の自律のごとき内容までも否定したという
ことを言うわけでは決していない。ここから、言い方の相異は両者の関係をみる視点の相異を示してい
るにすぎず、内実そのものにまで及ぶのではないのである。 ⑲この交友はヘルダーリンが精神的薄

明に陥るとともに、これに対するヘーゲルの怖れや感傷的生に対する訣別の決心から、そして何よりもヘーゲルの関心が青年時代の理想から反省形式・体系へと転化するとともに完全に途だえてしまう。だがこの間、ヘルダーリンの悲劇的運命をつぶさに実見したヘーゲルはその経験を「愛による運命との和解」の観念に昇華する。そしてこれがヘーゲル本来の弁証法の源であることは言うまでもない。このようにヘルダーリンは、健康な時も、また悲劇的運命のち狂気に陥ってからも、ヘーゲルの思想の形成にとって大きな役割を果たしているのである。もっともそれが体系にまで形成されるにはもう一人の旧友シェリングが存在しなければならなかった。

（弘前大学人文学部助教授・哲学）